

## 『虞美人草』の筍問答

*Junko Higasa 2014.1.4*

第三章で、京都の宿泊部屋の襖を見て宗近君が甲野さんに言う。『一面に金紙を張り付けたところは豪勢だが、所々に皺が寄っているには驚ろいたね。まるで緞帳芝居の道具立見たようだ。そこへ持ってきて、筍を三本、景気に描いたのは、どういう了見だろう』続けてゴージアン・ノット(ほどけない結び目を剣で切って解決したアレキサンダーの話)を持ち出す。この襖絵には藤尾と小野の華やかで歪んだ緞帳芝居のような恋があり、その中には「藤尾と小野と小夜子」「小野と藤尾と宗近」の三角関係が潜む。そしてその三角関係の結び目を解くために、宗近君が一本の筍を切って手早く解決することを暗示する。

しかし甲野さんは筍を研究して理性的解決を探る。『この筍を寐ていて横に見ると、脊が低く見えるがどういうものだろう』『二枚の唐紙に三本描いたのは、どういう因縁だろう』『筍の真青なのは何故だろう』

筍の脊が低く見えるのは、甲野さんから見ればドングリの背比べにしか過ぎないという客観だろう。

二枚の唐紙、即ち本来二つが収まるべき所に一つ余計にあるのは、三角関係の原因追究だろう。

筍が真青なのは「青年」の未熟であり、「小野と結婚できなければ藤尾は真青」「藤尾と小夜子に挟まれた小野は真青」「小野に捨てられたら小夜子は真青」である。「小野と藤尾と宗近」における「宗近＝アレキサンダー」の解決法を甲野さんは「青い」と思う。